

王輝著 橋爪大三郎・張静華監修 中路陽子訳

# 文化大革命の真実 天津大動乱

ミネルヴァ書房／2013年5月／728頁／4800円＋税



## 樋泉克夫

今から振り返るなら、やはり文化大革命（以下「文革」）が現代中国に対する関心を持った最初のキッカケだった。その時から半世紀ほどが過ぎた今でも、当時、特派員によって伝えられた衝撃的な現場写真を鮮やかに思い出す。

その写真には、怒れる群衆の前に引きずり出された走資派幹部の惨めな姿が写されていた。壇上に立たされた彼は、「紅衛兵」の腕章をした若者によって後ろ手に搾り上げられ、前のめりになりながら深々と頭を下げ腰を曲げ、毛沢東思想に反し資本主義の道を歩もうとした誤りを謝罪している。群衆からの理不尽極まる罵詈雑言に耐えているだろうその顔には、驚きと屈辱と忿怒の色が見て取れた。文革勃発前後に中国への関心を本格的に持ったがゆえに、やはり忘れることのできない報道写真だ。

これを最初の文革体験とするなら、次は留学先の香港である。

前年の六九年は中ソ国境の珍宝（ダマンスキー）島での武力衝突、毛沢東が「勝利の大会」と絶賛した共産党第九回

大会で後継者としての林彪の地位が確立するなど、中国では相変わらず激動が続いていた。

香港到着は七〇年秋。当時、中国からの死体が香港の海岸に漂着したものだ。雁字搦めに縛り上げられた死体は武闘での敗者であり、一部が欠けた死体は途中の海でサメにでも喰われた脱出失敗者だと報じられた。生々しい報道写真は日常茶飯事であり、偶然ながら現場に行くすことも数回あった。さすがに戦慄を覚えたものだ。

時には下宿の主人から粗末な衣服の眼光鋭い同年代を紹介されたこともあった。中国脱出に成功し、下宿の主人を頼ってやってきた元紅衛兵である。拙い中国語で聞き出した彼らの文革体験は、日本で伝えられていたものとは、どこかが違う。なにかが違っていた。

## 文革は「マルクス・レーニン主義を大きく前進せしめた」のか

たとえば『現代中国事典』（安藤彦太郎編、講談社現代新書、一九七二年）の

「プロレタリア文化大革命」の項をみると、

文化大革命は「闘・批・改」(闘争・批判・改革)の三段階に進攻するものとされるが、これは機械的に区切られるものではなく、全体として「闘・批・改」がくりかえされるだけでなく、各部門、各分野でもそのように進められる意味である。(中略)プロレタリア階級も当然みずからの文化を創造しなければならぬ。そのためには旧文化・旧思想と対決し、そのなかで新しいものを創り出す必要がある。これは長い期間を要するであろうが、このことなくしては未来を築くことができぬ。「不破不立」、すなわち旧文化・旧思想を破る闘争のなかで新しいものができてゆく、という考えである。破るとは文化財の破壊とは全くちがいがい、むしろ創造のいとなみである。革命的現代京劇、バレエその他、文化大革命のなかで新しい芸術が生まれていることを注目すべきである。最も抑圧された者の立場から、この世界を大

衆的次元においてとらえなおすこと、これが文化大革命の基本目標であり、この点からマルクス・レーニン主義を大きく前進せしめたものとして言うてよいだろう。

やや長い引用になったが、これが当時の日本における文革に対する——というより文革を積極的に評価する典型的な判断だったように思う。

当然、留学前、これに類する文革観を抱いていた。だが、ごく私的とはいいながら、広東省と接する英国植民地の香港であまりにも衝撃的な「現実」を知ることになったがゆえに、「最も抑圧された者の立場から、この世界を大衆的次元においてとらえなおすこと、これが文化大革命の基本目標であり、この点からマルクス・レーニン主義を大きく前進せしめたものとして言うてよいだろう」といった類のキレイごとには過ぎる見解では文革は判断できない。より複雑で多岐にわたる動機・原因・現実があるはずだ、と考へはじめた。

「文革とは、恐怖を前提にした愚かな大衆運動だった」の如

一三歳の年に文革が勃発し、『人民日報』総編集局長だった父親が投獄され、紅衛兵として文革を経験した唐亜明は、文革の原因について次のように綴る。

文化大革命の要因について多くの説がある。毛沢東にも個人的な問題があると思う。彼は劉少奇と自分が、いっしょくたにされるのが許せなかった。だが、彼をほんとうに文化大革命に駆り立てたものは、彼の理想であった。前代未聞の大革命を試みようとしたのだ。ソ連のような道は歩みたくなはない。彼は中国を世界革命の中心にさせ、自分は全世界の共産主義運動の指導者として、その名を永遠に残したいと考えた。彼の偉大さは、その非凡とも言える大胆さにある。故意に中国を一時的に混乱させ、「乱中求治」をもって、自分の地位を確固たるものにし、自分の政治的志を実現しようとし

たのであった。（『ビートルズを知らなかった紅衛兵——中国革命の中の一家の記録』岩波書店、一九九〇年）

唐亜明の指摘に抛れば、文革要因は毛沢東の「個人的な問題」であることはもちろんだが、より本質的に捉えるなら自らを抱く「理想」や「政治的志」が毛沢東を文革に「駆り立て」たことになる。

一方、唐より三十年ほど早く台湾に生まれ、建国前後に北京に移り住み、二四歳から六四歳の退職まで中央編訳局図書館長を務めた楊威理は、文革を次のように回想した。

中国共産党は地主、資本家、帝国主義者などの敵を打ち倒して、中華人民共和国を造り上げた。これで敵はもういないのだろうと思えそうだが、「いや、そうではない。敵はまだいる、敵は共産党内にあり」と言いだしたのが、毛沢東である。かれはプロレタリア文化大革命の二、三年前にこう言って、その敵を打倒せんがために、一九

六六年から十年にわたる、あの文革を引き起こしたのである。この「敵」どもは我々の側で眠っているのだ、身近に潜んでいるのだ、と彼は言う。そしてこれらの「敵」は中央にのみならず、地方の各機構にもはびこっている、と彼は見なす。これらの敵を彼は走資派と呼んだ。この走資派こそは「社会主義社会」に現れてきた新しい支配階級なのである。この一群の敵を打ち倒さないと、社会主義のこの国と、マルクス主義のこの党は潰れてしまふ、と彼は警告を発した。（『豚と対話ができたころ——文革から天安門事件へ』岩波書店、一九九四年）

つまり楊の考えでは、共産党内の「敵」を打倒せんがために、毛沢東が「あの文革を引き起こした」ことになる。では、はたして文革は理想的な社会主義社会を目指す思想なり理念の戦いだったのか。かりにそうであったにせよ、現地で接する『香港情報』は悲劇・悲惨・残酷に満ち溢れていただけでなく、その

後に出版された数々の回想録——たとえば『天籟——一個中国青年的自述』（凌耿、香港・友聯書報、一九七二年）、『大串連』（劉濤主編、北京・知識出版社、一九九三年）、『殺劫』（澤仁多吉・唯色、台北・大塊文化、二〇〇六年）、『毛主席席而戰爭——文革重慶武門実録』（何蜀、香港・三聯書店、二〇一〇年）、『血的神話——公元一九六七年湖南道県大屠殺紀実』（譚合成、香港・天行健出版社、二〇一〇年）、『延辺文化大革命』（柳銀珪、ソウル・図書出版社、二〇一〇年）、『雲南知識青年上山下郷運動』（中共雲南省委党史研究室編、雲南大学出版社、二〇一一年）など——を読み進むと、文革を「恐怖を前提にした愚かな大衆運動だった」（『私の紅衛兵時代——ある映画監督の青春』講談社現代新書、一九九〇年）と見做す映画監督・陳凱歌の「断言」が妙に納得できるのである。

## 「文革」を理解せずして

### 中国は理解できず」なのか

長い前置きを閉じ、本書に話を転ずる。

本書は、元天津社会科学院の王輝が天津における自らの文革体験を綴った『天津文革親歴紀事』の翻訳であり、巻末に原著にはない詳細な「訳注」「頻出語句註」「文化大革命期年表」が付され、天津市のみならず、中央における文革の動向を俯瞰するうえでも大いに参考になる。

著者は長期に亘って天津市委員会弁公庁に勤務し、文革初期には市委員会弁公庁副主任を、文革終息時には中共天津市委員会・市革命委員会弁公庁主任兼市委清查弁公室主任を務めている。それゆえ、本書には著者自らが体験した文革期の天津市における党・地方政府幹部の動き、さらには紅衛兵や労働者など文革派の跳梁跋扈する姿が克明に記され、当時の日本では伝えられることの少なかつた地方での文革を理解することができている。政治が主題のドキュメンタリーとしても読みごたえ十分だ。

ここで想像を逞しくするなら、党中央から次々に下達される指示を、どういふ方策で実施に移すべきかに戸惑い悪戦苦闘し、時の勢いに翻弄される天津市幹部、

さらには中央からの指示を都合よく解釈し自らの政治的欲求を押し通そうとする文革派の振る舞いは、改革開放政策に踏み切った後の党中央が次々に打ち出す新しい政策の取り扱いに苦慮したであろう地方幹部、それまでの政治から経済へと政策の重心を移すという新しい情況に遅しくも立ち向かっていったであろう人々の姿に重なって来るようにも思える。

それだけに本書は天津市で展開された文革の実状を克明に記録していることはもちろんだが、激動する政治を前にした中国人の振る舞いの一端を問わず語りに語つてもいる。であればこそ、本書の原典と思われる『文革史料叢刊——天津文革親歴紀事』（台北・蘭臺出版社、二〇一三年）の裏表紙に記された「文革」を理解せずして、中国は理解できず」との一句は、正鵠をえているといえるだろう。やはり一九六六年に勃発し、毛沢東の死の直後に起こった「四人組逮捕」によって事実上終焉を迎えた文革は、政治の翻弄される幹部から庶民までの姿を映し出すだけでなく、中国と中国人を理解

するうえでも避けては通れない難問である。

なぜ全世界を震撼させた「魂に触れる革命」が、十年の時を経て「大後退の十年」と「断罪」されるに至ったのか。

### 「魂に触れる」革命は…… 皆の魂を拷問にかけた」のか

「一九六六年夏、堪え難いほどの厳しい暑さのなか、気温よりもさらに高まったのは人々の運動に対する熱狂であった。全ての都市で「ペンをとって武器としよう！」反動組織に集中砲火を浴びせよう！」という造反派の声が響き渡り、皆気がふれたように闘争の標的を探した。かくして天津市でも過激であればあるほどに権力を揮えるといった政治的下剋上が連続し、市全体が「時狂」の渦に巻き込まれる。

「文革」によって「無政府」が「有政府」を破壊する激動のなかで数多くの造反組織が組織されるが、ある組織は「主に造反によって正規労働者の地位をえようとしているようであり、「なか

には過去思うように周囲から認められなかったために、「文革」において率先して行動を起こして第一人者になろうとする者もいた」のである。

著者は「道理といったものが人々の政治的熱狂のなかで完全に埋もれてしまった情況で、正しいかそうでないかを判断する基準などどこにあるというのだろうか。大局が間違っているのだから、部分的にも疑いなく間違っているのである」と説く。ならば、その間違った「大局」をもたらしたのは何だったのか。誰の責任で「大局が間違っている」しまったのか。

著者は「天津における「文革」の進む方向」を定めたと看做す周恩来講話を指し、ある冤罪事件の報告を「陳伯建が聞き入れ、周恩来が同意し、そして当然最後には毛沢東が批准したものであったということがわかる」とした後、「文革」は毛沢東自らが発動し指導したものであるが、周恩来も「文革」の重要な執行者であったということだ」と結論づける。もちろん著者は「文革」の重要な執行者」には、林彪、康生や「四人組」、こと

に江青を加えることを忘れてはいけない。著者は「文革」は完全に誤りであるが、「経済建設は緩やかではあるが着実に進み、国防はしっかりしていた」「米中関係正常化と改革開放に道を開いた」と前向きな評価を下す。であればこそ、中国の現状を見据え将来を考慮しようとするために、本書は一読されるべきものだろう。

ここで、その後の我が国の中国理解を考える。「中国の夢」を掲げる現状を如何に評価するのかが別として、はたして文革期の「蹉跎」を克服したといえるのか。

最後になったが、再版の際には、明らかに誤植と思われる部分に加え翻訳された日本語の再検討をお願いしたい。たとえば毛沢東が劉胡蘭に与えた賛辞が「生の偉大、死の栄光」と訳されているが、「偉大な生、栄光の死」とした方がスッキリするだろうに。中国語を学び始めた半世紀ほど昔、確か「生得偉大、死得光荣」と学んだと記憶している。もともと前掲の蘭臺出版社版では「生的偉大、死的光荣」と記されてはいるが。